

季風経営理論

～季節を愉しみ風土に生きる～

抜粋要約版

平成28年5月
季風経営研究所

- 日本の「地域の衰退」、それは人々が「風土」から遠ざかり、日常の世界から「文化」が後退し、「文明」へ依存し続けたことによる。今までにない画期的に新しいものを待望し、それがすでにあったものにとって代わることが一貫して続けられてきた。
- 企業の成長を軸足とした「国」としての復興や発展を指向したものの、地域や個人はその陰に追いやられた。そして、地域や個人にあった「経営」の機能は一貫して後退し続けている。
- 人間の創造性、美的感性、能力は無限であり、万人に等しく備わっている。これらは人が「風土」に生きているとき、人が「風土」を作っているときに引き出され、発揮される。そこで営まれる衣食住そのものが「文化」となる。
- 「文明」が「文化」を駆逐している。これが現代の様相。
- 地域に生きる人々は「風土」に生き「風土」をつくり、「文化」を育んでいる。「文明」に従属する現代人が「再生」することを助け彼らを救うことができる先導的な位置にある。

「文明」「文化」「風土」

- 【文明】 科学、技術とこれによって得られる利便の一切。
 - 文明そのものに文化的価値、「品格」はない。
 - 文明は、文化を形成する手助けにもなるが、これを破壊することもある。
 - 農耕文明は文化を形成した。
 - 文字、芸術、建築などの表現技術、測量技術なども文化を形成した。
 - 文明は現代に至り環境、風土、文化、景観を破壊し始めている。
 - 文明が文化形成に結び付いていた時代は1980年代を境に終焉している。
- 【文化】 芸術的価値をもつ、風土に生きた生活様式と営み。
 - 文化的価値をもつものには美と品格が備わる。
- 【風土】 地形・気候などの自然環境と生態系及び
これらが生み出す営みの一切
 - 風土に生きる感性が生む営みには文化的価値が生まれる。
 - 風土から乖離した営みは人間から情感を奪う。

現代の様相

文明が文化を駆逐している。

これに伴い人間だけが風土から乖離し続けている。

「地域」「共同体」「経営」

- **【地域】** 特定の地理的領域、そこにある風土、人々とそこで成立し営まれる社会・経済・文化の総体。
 - 日本では、これが衰退し実体を失いつつある。
 - 東京などの大都市圏も「地域」の集合。
大都市圏にある各「地域」も衰退局面にある。
- **【共同体】** 地縁的つながりを軸として一定の利害を共有する人々の共同生活及び共同事業の様式。
 - これに対して「コミュニティ」は地縁的つながりを超えても形成される(SNSなど)。
- **【経営】** 理念に基づき、必要な資源を調達・動員し合理的な道筋をつけて、目的や目標を達成していくこと。
 - 経営を実践する人材は地域から離れ続けている。
 - 地域や共同体から経営の機能が後退し続けている。

「地域再生」「地域再生の始動」

- 【地域再生】

地域が地域資源の活用を基軸に社会・経済・文化の発展の単位としての地位を回復するプロセス。

- 【地域再生の始動】

地域における（個人、世帯、個人事業主などの）「個」の集合を共同体化し経営の単位とし、実際に経営を機能させるプロセス。

風土・景観と街・村

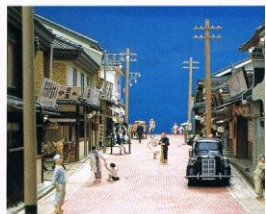
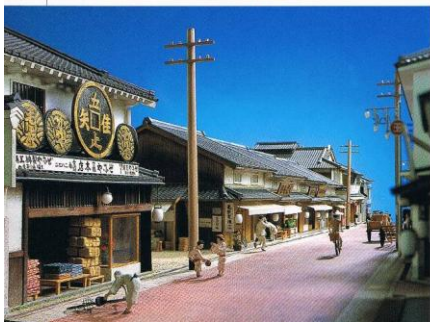
- 風土に生き、自然・生態系の循環の構成要素になっている、これが日常となっている時、人間の美的感性は最大限に掘り起こされ、発揮される。
 - あらゆる建築物にこれを見出すことができる。
 - 戸建住宅、集合住宅、店舗、旅館、ホテル、駅舎、橋、社寺...
 - あらゆる工業製品にこれを見出すことができる。
 - 工芸品、家具、家電、クルマ、オーディオ...
- 美的感性が発揮され形成された町並み、界隈は美しく品格をもつ。
 - 美しく品格をもつ町並み、界隈は発祥の東洋・西洋を問わず洗練された意匠・デザイン、を吸収し、引き立たせ、人が集まり楽しむ場所になる。
 - これは、長い歴史とともに風土のなかで培われ続けるものであり、人為的な「デザイン」ではない。
 - ここでつくられる商品、ここにある個店、さらには生活そのものも美しく、品格が備わる。

風土・景観と街・村

- 日本の場合、これ(美的感性が発揮され形成された町並み、界隈)を自己否定し、積極的に排除した。
 - 江戸時代末期～明治以降、欧米礼賛・追従の価値観が生まれたが、大正時代までは界隈は品格を保っていた＝日本の美的感性が欧米の価値を受容できていた。欧米の美的感性との調和がみられた。
 - 昭和以降、特に終戦後に欧米礼賛・追従の価値観が加速し、かつ自国の文化を劣等視・否定し、「新しい時代」の到来を熱望した。
 - その結果美的感性が退化したことにより、本来の文化的価値、品格を駆逐し始めている。
 - 商店街のアーケード、(シャッターを下ろす等)商店の外観はその典型。
 - 象徴的なものとして東京の日本橋。
- 美的感性の豊かさと貧しさのもたらす明暗
 - 美しさと品格のある町や村には人々は愛着を感じ、住んでみたい場所になる。絵や写真に残したくなる風景がある。そこではデート(逢瀬)を楽しむことができる。
 - 人が集まり、人口は増える。新たな商業のチャンスが広がる。
 - 美しさや品格の欠ける町や村には人々の愛着は生まれにくく住みたい場所とはならない。絵や写真に残したくなる風景が存在しない。そこではデート(逢瀬)を楽しむことはできない。
 - 少子化に拍車がかかる。新たな商業のチャンスは後退する。

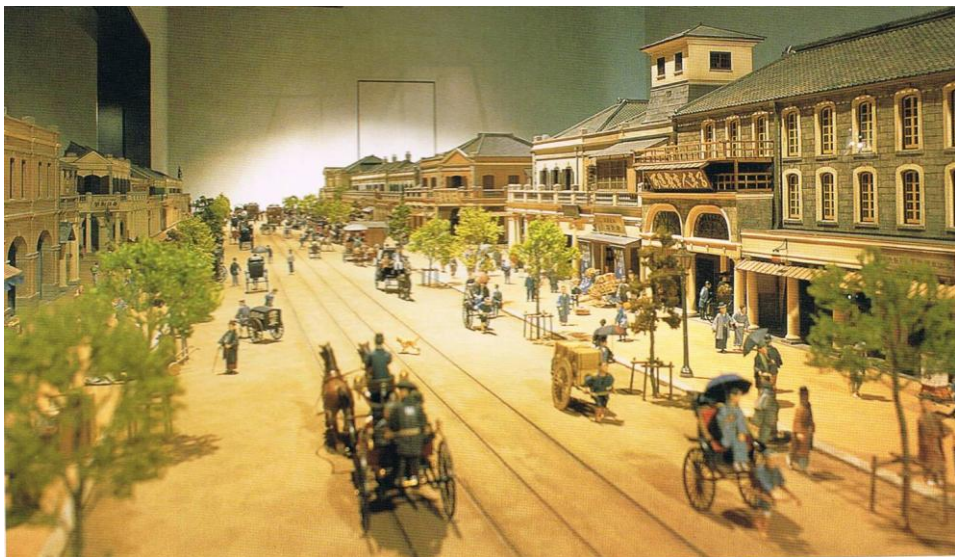


大正〜昭和初期
大阪 住之江区



(大阪府立住まいのミュージアム)

(江戸東京博物館)

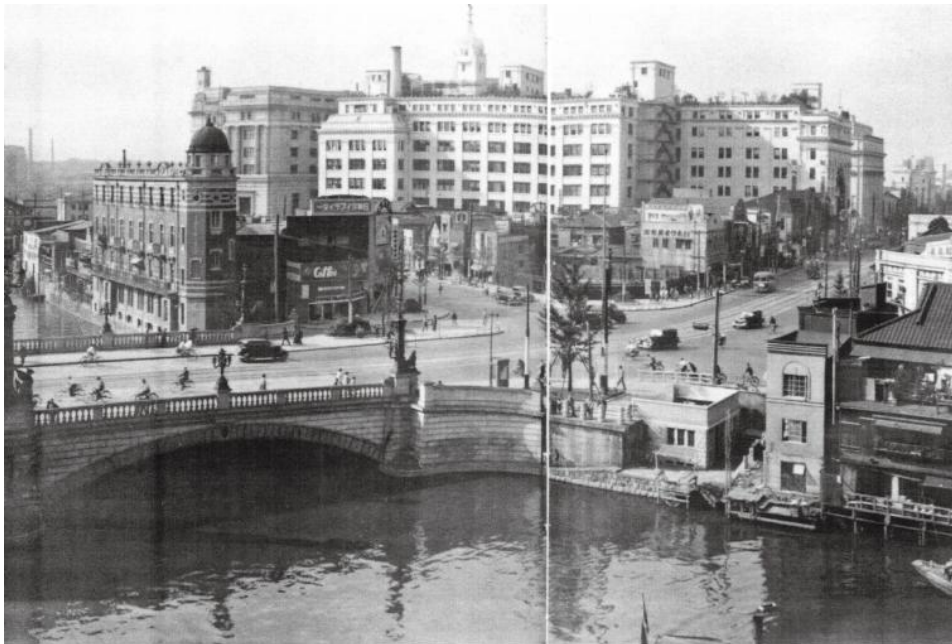


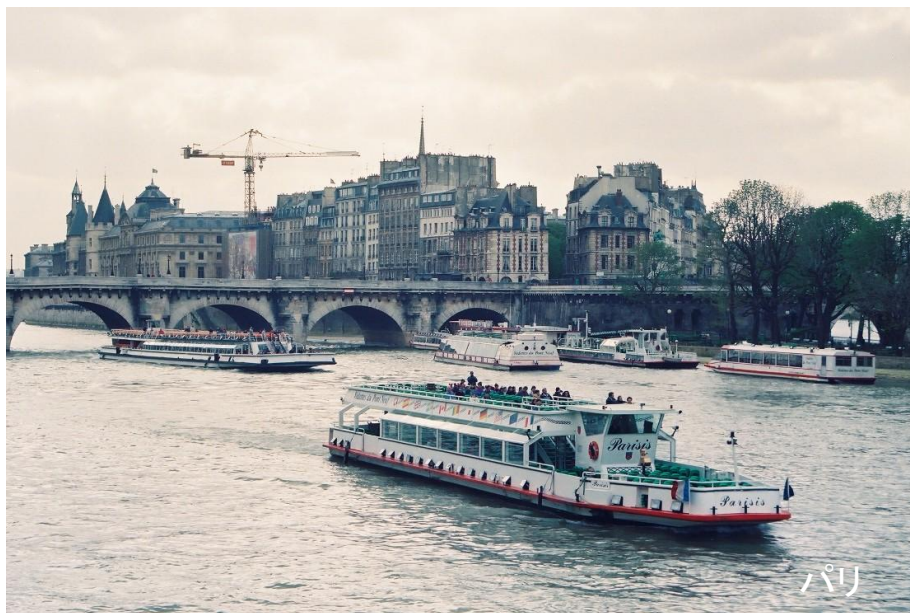
銀座煉瓦街 明治10年代後半



江戸初期 日本橋北詰付近 町人地

江戸・東京日本橋





パリ



イタリア・ポルトフィーノ



スリランカ・ハバラナ



スリランカ・ハバラナ



イタリア・Chioggia



千葉県香取市佐原



豊岡市津居山・瀬戸



京丹後市久美浜



富山県南砺市福光



東京葛飾区四ツ木

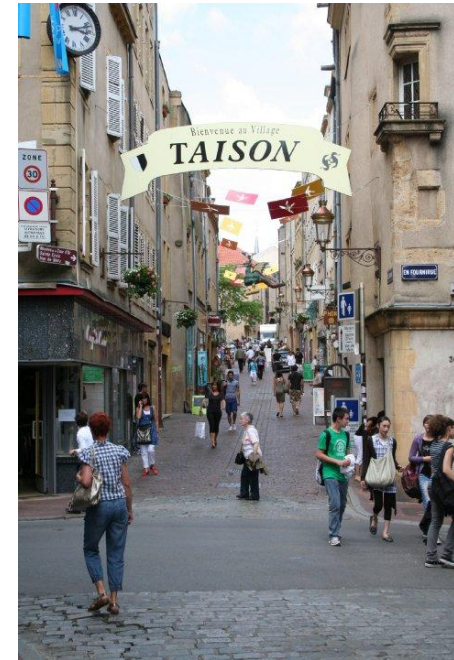


フランス St. Paul de Vance



広島県尾道市

Metz(フランス北東部)



自動車の流入を排除した界限。広場に人が集まり飲食を楽しむ。各店舗は個性とセンスに磨きをかけ人を惹きつける。



文化的佇まいをもつ駅舎。駅前には大広場、地下には広大な駐車場。巨大商業は郊外指定区域に出店。¹³

地域経済の変化

- 「19世紀においては、自己完結できない小さな企業が、産業ごとに特定地域に集積し、地域内で競争と協力の仕組みをつくり、地域的な競争力を企業の競争力の源泉に追加していた。」
- 「地域内においては特定産業にかかわる社会的分業、関連・供給産業の発達が経済の地域内循環を活発にし、地元市場向けの産業や域外からの移入品への需要を増やし、農産物需要を高めながら、背後地農村との多面的結び付きをもっていた。」
(中村2008「地域経済学」)
- (「ローカルな資本主義」から)「グローバル資本主義」の時代に入ると、資本主義はその様相をすっかり変えてしまった。
(中谷2008「資本主義はなぜ自壊したのか」)

19世紀から1980年代、バブル期以前までは地域単位で時流に応じて新陳代謝(**Renewal**)を繰り返してきた。

その後グローバル化が一気に加速して Renewal 対応力を追い越し、既存の営みの多くが新たなものにとって変わられた(**Replace**)された。

地域経済の変化(続)

【流通・外食他の諸産業の全国規模での拡大・成長。】

- チェーンストア理論(標準化されたサービスの多店舗展開こそ世の中に利益をもたらすという理念が根本)の実践。
- あらゆる業種・業態に展開される。
- グローバルなサプライチェーンの出現、企業内(間)で(ほぼ)自己完結。
 - 原材料の調達・生産拠点・労働・物流の確保。
 - 地域産業の「出番」の減少(地域の生産者、卸業、運送業等を必要としない)
- 激しい競合時代へ突入。
 - 「三方よし」などと言っていない生き残りをかけた熾烈な戦い。負けたら廃業・倒産。疲弊と消耗と葛藤の日々。
 - 経営者は自身を、自社従業員を、自社取引先を優先的に守る。
 - 他社・他店よりも安く(価格破壊指向)。
 - 利益体質の強化のため人件費を筆頭にコスト削減。
 - 不採算店舗の躊躇なき撤退。

地域経済の変化(続)

全国小売業内業態別売上高占拠率の変化

単位：％

	2009	1995	1980
百貨店	7.5	8.7	9.0
日本型スーパーストア	8.9	11.1	14.0
スーパーマーケット	13.3	8.9	
ホームセンター・オートセンター	3.7	2.1	
コンビニエンスストア (FC を含む)	8.4	n/a	n/a
ドラッグストア	3.9	n/a	n/a
専門店	13.8	7.7	3.0
その他の業態	5.0	4.1	0.9
合計	64.5	42.6	26.9

(出所) ペガサスクラブ (日本リテイリングセンター) (2010) 資料「JRC 調査『ビッグストア統計』の変化」
<http://www.pegasusclub.jp/pdf/statistics.pdf>

全国の就業者総数・自営業主数と雇用者数内訳

	就業者総数 Employed Person	自営業主 Self-employed worker	雇用者 Employee
昭和 60 (1985) 年	5672 万人	869 万人 (15.3%)	4277 万人 (75.4%)
平成 12 (2000) 年	6337 万人	711 万人 (11.2%)	5284 万人 (83.4%)
平成 22 (2010) 年	6267 万人	587 万人 (9.4%)	5453 万人 (87.0%)
25 年間で：	595 万人増	287 万人減	1176 万人増

(出所) 総務省統計局労働力調査 (2011 年) より筆者作成

全国商店街の店舗数、景況、来街者数変化

【店舗数推移】：

商店街の平均店舗数は 51.7 店。平成 18 年度調査の平均店舗数 (59.2 店) と比べると 7.5 店減少。昭和 60 年度の平均店舗数 85.7 店と比べると 34 店減少。

【最近の景況】：

「繁栄している」が 1.0%、「繁栄の兆しがある」が 2.0%。「衰退している」が 44.2%、「衰退の恐れがある」が 33.4%、「まあまあ (横ばい) である」が 17.9%。

【最近 3 年間の商店街への来街者数変化】：

「減った」が 76.8%、「増えた」が 5.6%。

【来街者が「減った」とする要因 上位 5 位】：

「魅力ある店舗の減少 (55.1%)」、「近郊の大型店の進出 (54.6%)」、「業種・業態の不足 (48.5%)」、「地域の人口減少 (33.3%)」、「駐輪場・駐車場の不足 (16.5%)」

(出所) (株) ちばぎん総合研究所 2011「商店街実態調査」の統計資料をもとにより筆者作成

地域経済の変化(続)

- 消費生活が飛躍的に豊かになった。
 - かつては考えられない革新的な商品・サービスが驚くほどの低価格で入手可能になった。
- 消費が促進され、製造業にも利益をもたらした。
- 消費の舞台が郊外へと移る。
 - 幹線道路沿いには全国一律の景観が広がる。
 - ひと筋内側、市街地内の旧街道沿いは昭和の面影そのままに衰退。
- 地域の商業は衰退。
 - 量販店の圧倒的な品ぞろえ、価格に太刀打ちできない。
- 代々の商売に後継者不足。
- 地方から都市への人口(頭脳)流出。
- 各地の中心市街地がシャッター街と化す。
 - 次々に空き店舗が生まれ、放置される。こうはなっていない街を探すことは今や大変に難しい。繁栄している街は観光依存のケースが多い。
- 大都市圏の中心市街地・商店街においても代々の商売は激減
- 「需要<供給」が全国共通となる。

《重要な背景は「クルマ社会(モータリゼーション)」》

まとめ(1)

- (再出)日本の「地域の衰退」、それは人々が「風土」から遠ざかり、日常の世界から「文化」が後退し、「文明」へ依存し続けたことによる。今までにない画期的に新しいものを待望し、それがすでにあったものにとって代わることが一貫して続けられてきた。
- (再出)企業・組織の成長を軸足とした「国」としての復興や発展を指向したものの、地域や個人はその陰に追いやられた。そして、地域や個人にあった「経営」の機能は一貫して後退し続けている。
- 地域住民は「消費者」「受益者」となる。生産しない、商いをしない。
- 多くの地域で街は美しさと品格を失う。そこに住みたい、そこで働きたいと思わせる魅力が後退し人口減少に拍車がかかる。
- 人口の減少とともに顧客を失った大規模商業が撤退する。
- 地域には何も残らなくなる。「消滅危惧」の市町村。

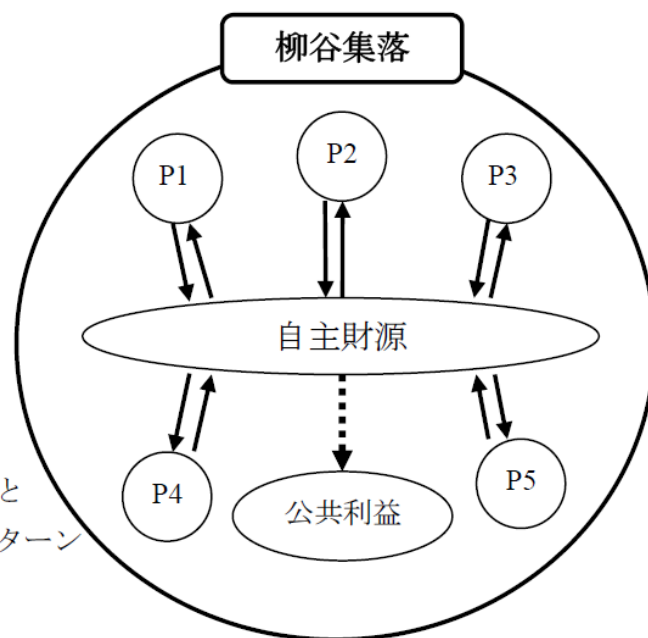
特別警報

柳谷集落(やねだん)の事例

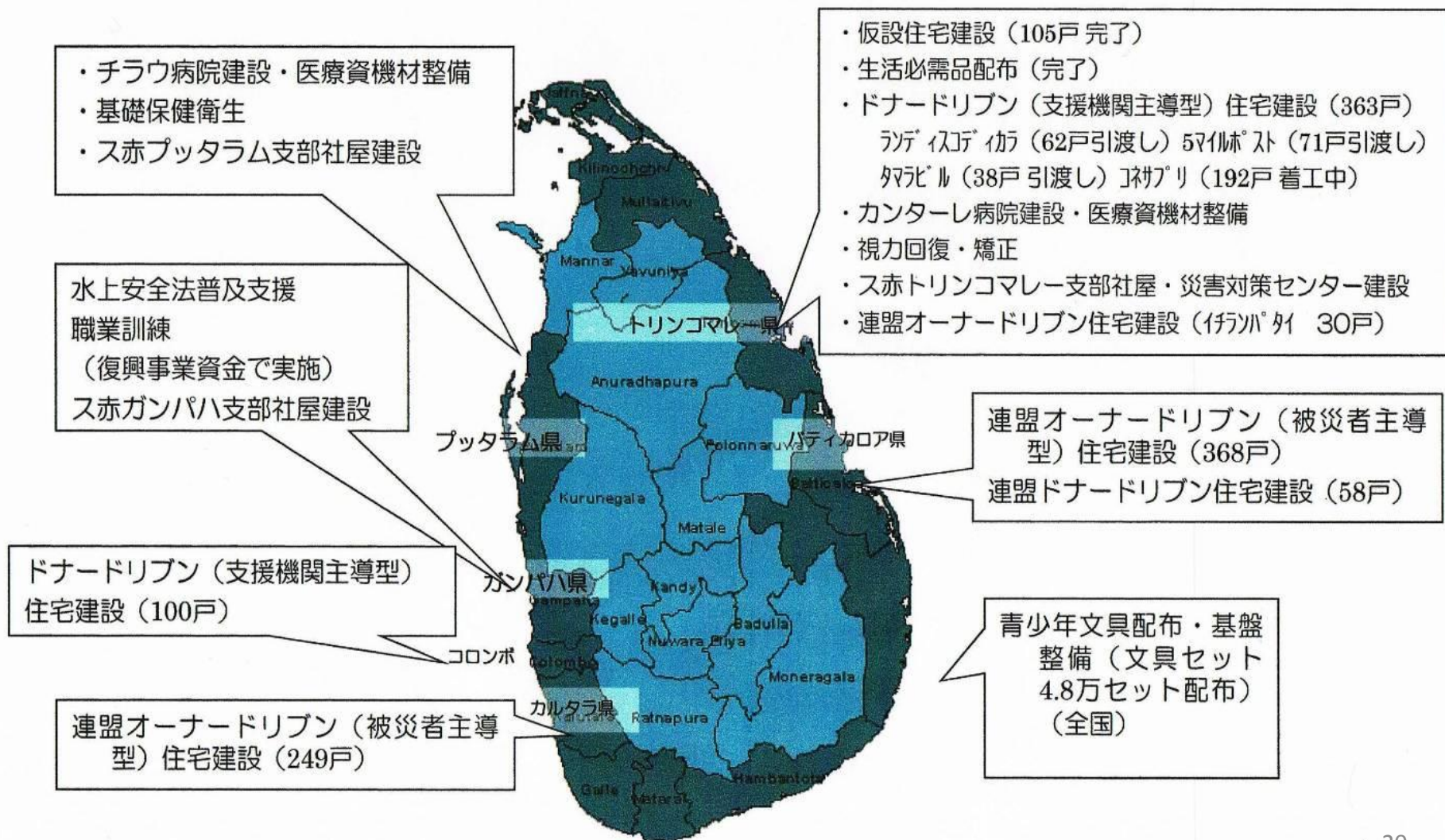
- 「自主財源」＝集落(自治公民館)が所有し管理するファイナンスの仕組み。
- 集落は共同体になっている。経営の機能を発揮している。
- これを軸に創業・起業し、事業を経営している。
 - － さつまいも、焼酎、「土着菌」、食堂...
- 「児童遊園」を全員参加で造成しつくり上げた感動体験は集落を一変させた。
- 老いてなお全員が大活躍。個々人が持っている技術、能力を余すところなく発揮。
- さらに移住者の才角も取り込む。
- 元気！ 心が熱い！
- 自立した再生。補助金に頼らず。
- 空き家再生も集落総出で実行。
- 公共利益への還元を実施。
- 卓越したリーダー。



P : 個別プロジェクト
('生産活動')
⇔ :
'生産活動' への投資と
'生産活動' からのリターン
.....▶ :
公共利益への還元



(参考)スリランカ津波被災地域 復興プロジェクト



スリランカ 浜の男たち





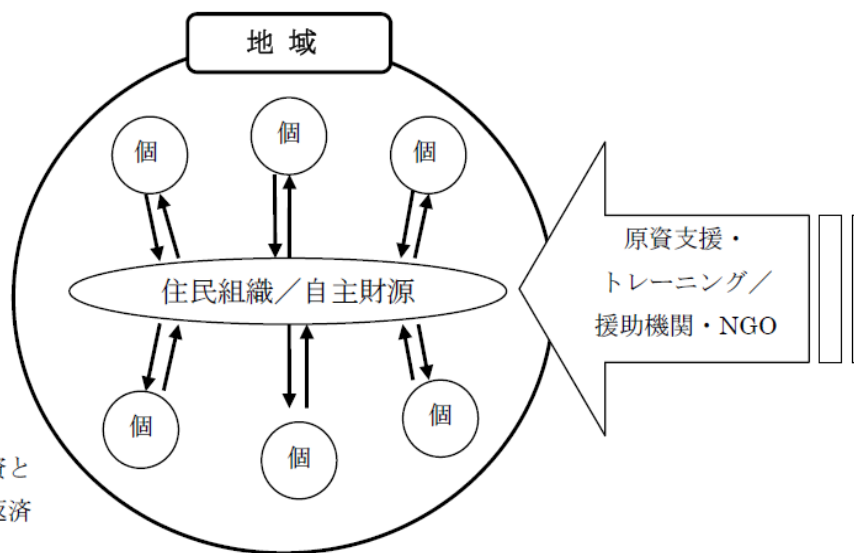
スリランカで展開 自主財源 (マイクロファイナンス)

スリランカ津波被災地域において
救援、復興、住宅建設(1500戸)、
生活再建のプロジェクト展開。

生活再建のフェーズで
マイクロファイナンスを実施。
金融の仕組み・お金のオーナーは
住民組織であり、

誰のどのプロジェクトにいくら融資をするか、
利率をいくらとするかなどマネジメントは
住民組織に属する。

お金を軸にした共同体の絆は飛躍的に
高まり、融資プロジェクトは次々に成功し
生活再建を後押し。



⇄ :

「個」(世帯) への融資と
「個」(世帯) からの返済

(出所) 筆者作成

スリランカで展開・自主財源 (マイクロファイナンス) ローンの活用実績

- 朝食配達業開業
- 結婚式業の機材増強
- 貸店舗建物の補強
- よろず屋の開業
- クリニック用医薬品増強
- 漁網購入
- ボート購入
- 食糧販売業増強
- 果物商開業
- 店舗建設
- 養鶏業拡大
- 菓子製造業開業
- 生活雑貨製造業開業
- 日用品店設備増強
- 食糧品店開業
- 八百屋開業
- 養鶏業強化
- 養鶏業開業
- ボートエンジン修理
- 雑貨屋開業
- 潜水器具増強
- アイスキャンディ販売業開業
- バナナ栽培開始
- 電気代・水道代
- 息子の治療費
- 木材業仕入れ
- 家庭菜園
- ランタン用オイル仕入れ
- 食料品店開業
- 日用雑貨店開業等

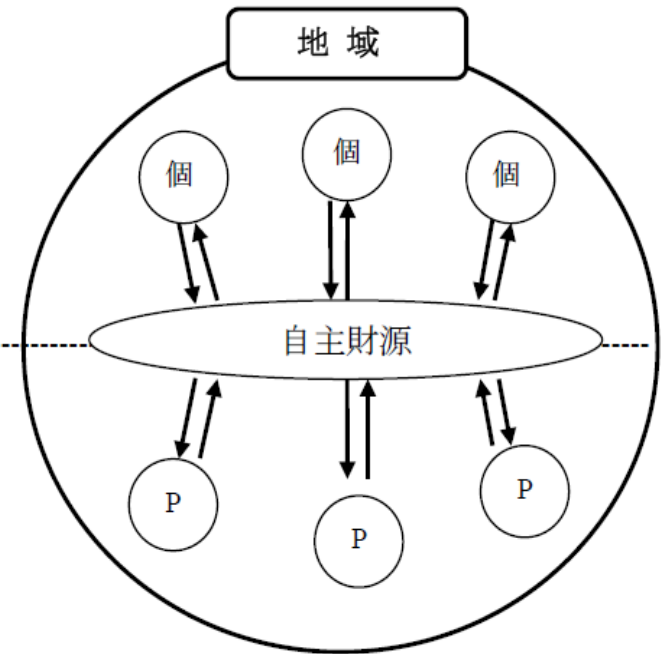
ハイブリッド式 自主財源

スリランカ
津波被災コミュニティ

鹿児島県柳谷集落
「やねだん」

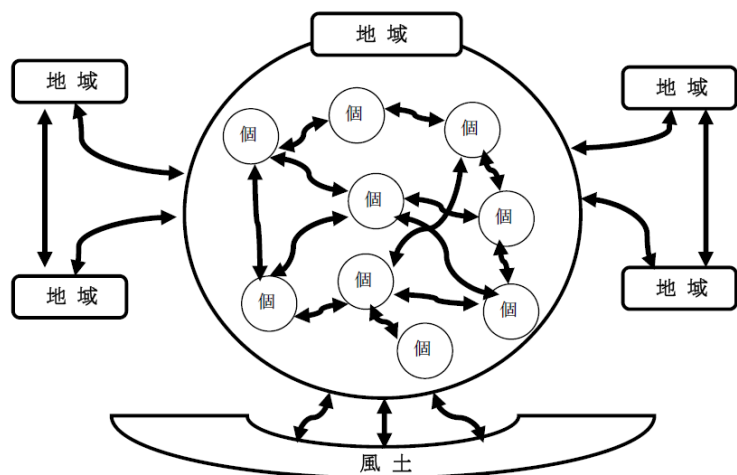
「個」への融資と
「個」から返済

↑
↓
「プロジェクト」
への投資と
「プロジェクト」
からのリターン

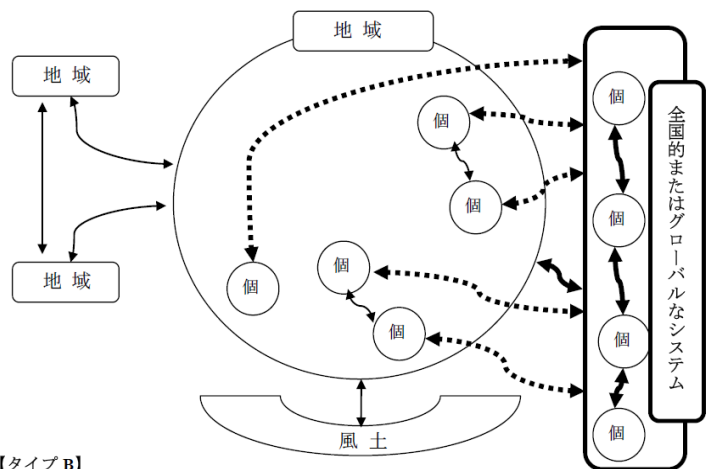


(出所) 筆者作成

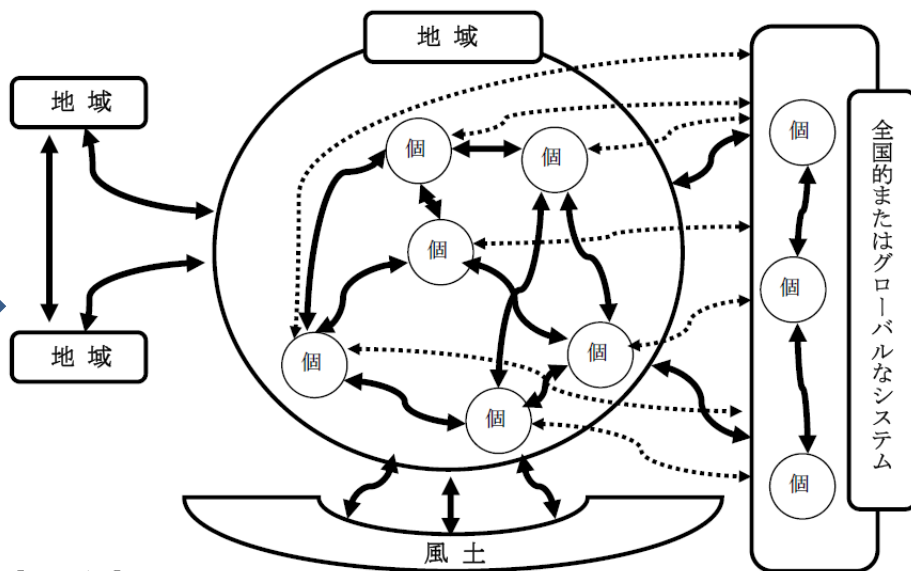
- 「自主財源」とは地域におけるビジョンを実現し、戦略を実行するために必要な資金と、そのマネジメントの仕組み。
 - 事業への投資・融資を個人（個人事業主）レベルと地域（共同体）レベルのいずれにおいても行う。
 - 投資および融資を地域自らが優先順位を確定し、意思決定し、実行する。
 - 事業を開始するときの投資と、事業から得られた営業利益を留保分として「自主財源」に戻す（「リターン」）循環を創出する。
- 運営管理する実行体制が必要。
 - 事業への投資・融資、資金管理にかかる知識・技術にかかる教育訓練が不可欠。専門技術をもった外部人材による支援を得る必要がある。



【タイプA】
(出所) 筆者作成



【タイプB】
(出所) 筆者作成

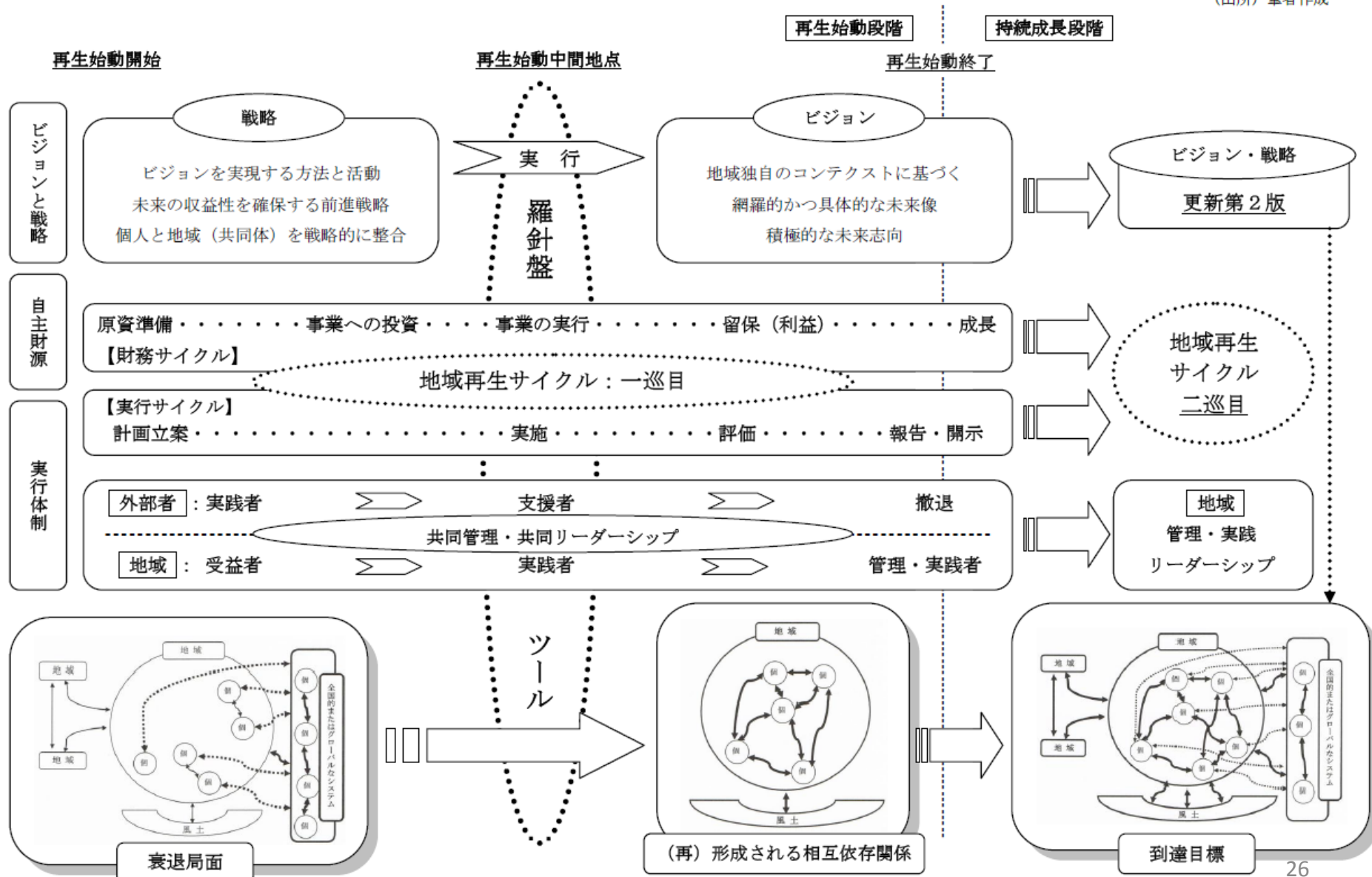


【タイプC】
(出所) 筆者作成

地域再生 関係性の回復と再構築

内発的再生始動モデル

(出所) 筆者作成



人間の創造性、美的感性、能力は無限であり
万人に等しく備わっている。

人間は、過去の一切の集合である「原因」を「結果」として表出させるはたらきを一時も休むことなく、一切の
狂いなく続けている。

では、人間とは何か？



石原さとみ

- その国を 国旗を思い出すのではなくてひとりの顔を思い出すって一番平和につながる気がすると思います。
- みんな違うしみんな夢があって 夢を持とうとして みんな悩みがあって 自分にしか経験できないことをして 漠然と「アフリカ」「元子ども兵」「貧困層」とかいうカテゴリーで今まで見てきたのがひとり個人の人間としての つながりになれたのがうれしかった。



KOKIA

この地球がまるいお陰で
誰もが世界の真ん中に居る。

小野洋子

- それぞれの人間は、一つの宇宙全体のようなもの。
- 誰でもラブが何であるかは気が付いているのです。それは説明できるものではなく、とても強いエネルギーであり、パワーなのです。
- 真理は私たちの中にある。私たちそれぞれの中にあります。その私たちのなかにあるパワーを引き出して、あらゆる状況で日々対処していく、それでよいのです。
- 私たちには無限の可能性があり、私たちの権利、私たちの自由、そして私たちの力は、今日の制度を超越していくと思います。私たちは、自分自身に限界を設けてはいけません。
- そこで、一面で外に対して戦うよりも、私たち自身に中心をおき、無限である私たち自身の力に頼るべきだと思います。





莊子 (B.C.369-B.C.286)

- 我々が好もうと好むまいと、あるいは認めようと認めまいと、天と人は一体なのである。ただ、それを悟ったのが「天の徒」であり、悟れずにいるのが、「人の徒」であるという違いがあるにすぎない。人であると同時に天でもある存在、これが「真人」にほかならぬ。(大宗師)
- 真人は、生に執着せず、死をも忌避(きひ)しない。この世に生を受けたからと言って喜ぶこともなく、この世を去るからといって悲しむでもない。ただ無心に来たり、無心に去りゆくのみである。自身の存在をも一個の自然現象とみなし、死についてあれこれと心を煩わさない。与えられたいっさいを素直に享受し、しかも一切に執着をいだかずこれを自然に返す。知によって「道」を損なわず、人為によって自然を傷つけぬ生き方とはこのことである。(大宗師)

ガンガジ Gangaji (2008)

(ガンガジが『アウェアネス』(awareness)は万物に宿るもの、命であり神である、と説いたことを踏まえて)

なんとも理解できないです。

- 理解というものは、やってくるものです。一人ひとりの心、脳、はたらき、これは家(home)に戻っていきます。そこで育ち、豊かになっていき、その「家」から、その内側から、理解というものはごく自然に湧きあがってきます。あなたが得ようとあくせくすることではありません。

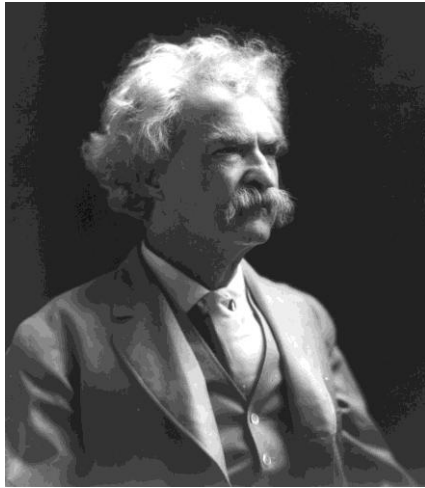
あなたはアウェアネスということについて話をされました。その働きというものは、僕自身の中からでてくるものなのですか？ アウェアネス、とは何なのか分からず、混乱しています。

- 混乱した、それは大いに結構なことです。物事を秩序づけ、体系づけてひとつひとつこれを理解した、あれも理解した、と。それは心と脳の発達のためには大事なことです。「混乱してしまった」、それが居心地悪く感じるのは、また秩序づけようとしてしまうからです。混乱していること、混沌としていること、それはいいことです。混乱は混乱のまま、混沌は混沌のままでもいいのですよ。

その、アウェアネスというのは...

- あなた自身のことです。
アウェアネスに僕が属しているのか、それとも僕がアウェアネスに属しているのか、この両者の関係は...
- あなたがそれです。あなたがアウェアネスなのです。





マーク・トウェイン (1906, 対話篇「人間とは何か」で「老人」の言葉として)

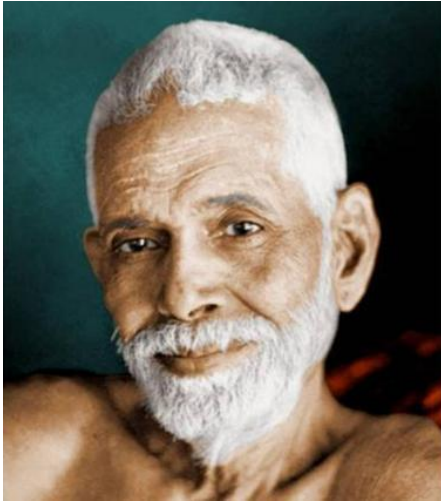
- 法則というのはただ一つ、根元もまた一つってことだな。つまり、ゆりかごから墓場まで、人間ってやつは行動ってのは、終始一貫、絶対にこの**唯一最大の動機**——すなわち、まず自分自身の安心感、心の慰めを求めるという以外には絶対にありえんのだな。
- わしたち人間の存在ってのはすべてこれ(どんな代償を払っても、まず自己承認をとらねばならなければおかんという、この**至上命令ともいうべきもの**)にかかってるといってもいいんだがな。いわばわたたちの呼吸、心臓、血液だといってもいい。これなしには、わしたち人間は無気力な形骸、死体にしかすぎんのだ。誰もなんにもやらんだろうし、進歩もない。世界は永久の静止になっちまうよ。この**途方もない原動力**、わしたちその名前を聞くとときには、むしろその前に脱帽して、頭をたれるべきなんだがなあ。
- 君の理想をより高く、さらにより高くするように努めることだな。そしてその行き着くところは、自らを満足させると同時に、隣人たちや、ひろく社会にも善をなすといった行為、そうした行為の中に君自身まず最大の喜びを見出すという境地を志すことさ。



イエス・キリスト

神の国はいつ来るのかと、パリサイ人が尋ねたので、イエスは答えて言われた、
 「神の国は、見られるかたちで来るものではない。また『見よ、ここにある』『あそこにある』などとも言えない。神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」
 (ルカによる福音書17章20－21)

イエスを演じる Ted Neely (映画 Jesus Christ Superstar (1971)より)



ラマナ・マハルシ (1879-1950)

- 真我の実現とは新たに獲得されるような何かではない。それはすでにそこに在る。必要なのは「私は実現していない」という想念を追い払うことだけだ。
- 静寂あるいは平和が真我の実現である。真我が存在しない瞬間はない。
- (「どのようにして真我到達すればよいのでしょうか？」問いに対し)
真我到達するということはない。もし真我が到達されるようなものなら、それは今ここにはなく、未来に獲得されるべき何かを意味する。それは永遠のものではない。永遠のものでないなら、そのために努力する価値はない。だから私は真我は到達されないと云うのだ。あなたは真我である。あなたはすでにそれなのである。
- 事実上、あなたが自分が至福に満ちた状態に無知だということだ。無知は次から次へと興り、至福である純粋な真我到にヴェールをかけてしまう。ただ誤った知識である無知のヴェールを剥ぐことだけを試みればよい。

ヤージナヴァルキア (紀元前8世紀から前6世紀)

(西暦紀元前8世紀から前6世紀にわたりインドでつくられた哲学的思想、世界観を取り扱った数十種の典籍である「ウパニシャッド」の「ヤージナヴァルキア対話篇 上 ジアナカ王宮における問答」より)

「万有内在の自我とは如何なるものですか？ ヤージナヴァルキアどの」

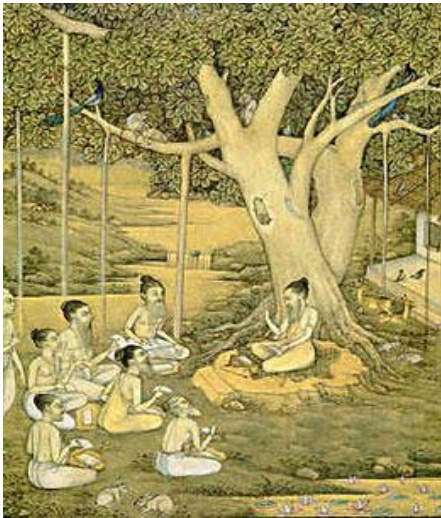
「現に呼気(感官)を以て呼息している者が貴公に存する万有内在の自我です。吸気を以て吸息している者が貴公に存する万有内在の自我です。上気を以て上ってゆく者が貴公に存する万有内在の自我です。かくの如きものが貴公のもつ万有内在の自我です」

「まるで『あれは牛だ』『あれは馬だ』とでもいうように明瞭に貴師は御説示下さったが、さらに詳しく現的であって非秘陰的な梵即ち万有に内在する自我を解明してください」

「貴公の自我が、とりもなおさず万有に内在する自我です」

「万有内在の自我とは如何なるものですか？ ヤージナヴァルキアどの」

「貴公は見るという作(はた)らきの主体たる見者(みて)を見ることはできません。貴公は聞くという作らきの主体たる聞者(ききて)を聴くことはできません。貴公は意(おも)うという作らきの主体たる意者(おもいて)を意(おも)うことはできません。貴公は識(し)るという作らきの主体たる識者(しりて)を識(し)ることはできません。しかし、この主体こそ貴公に存する万有内在の自我なのです」



【人間の創造性、美的感性、能力は無限であり万人に等しく備わっている。】

人間は、過去の一切の集合である「原因」を「結果」として

表出させるはたらきを

一時も休むことなく、一切の狂いなく続けている。

- この世にあるスポーツの種類は数えきれない。そしてどのスポーツにも頂点を極めたプレイヤーのプレーには、同じく芸術性ときには神性をも感じさせるものがある。つまり、人間の心身とは、かくのごとく変幻自在に、それぞれ別個のルールをもつあらゆるスポーツ競技に対応し、訓練と努力、意志の持ち方次第で、いかようにも動き、走り、打ち、投げ、滑り、泳ぎ、跳び、舞うことができるようになる、しかも次世代においてさらにどんな高みに行くのかさえわからない... 無限である。
- 音楽のジャンルはこれも数多い。ロック、ポップ、ジャズ、クラシック、雅楽、神楽、囃子... ロックのなかでさらに細分化され、ジャズ、クラシックにおいても時代とともに、いくつもの表現形態がある。そこに持ち込まれる楽器の数はまた無数、歌唱法もまた多様に分かれる。同じ楽曲でも楽団や指揮者によってまったく別の音楽となる。人間はそれらにすべて自在に対応している。
- 集中力が高まっているときの、いわゆる頂点を極めたとされるスポーツ選手のプレー、音楽家の作品や演奏、これにふれたときに、我々はその凄さを感じ取り、理解することができる。これは訓練・習慣により、その凄さがよりいっそう深く理解できるようになる。中継映像を観るとき、彼らの精神集中や緊張がひしひしと伝わり、武者震いをおこさせることもある。自分が実際にプレーしているわけでもないにもかかわらずプレイヤーの境地を体験すらできる。

【人間の創造性、美的感性、能力は無限であり万人に等しく備わっている。】

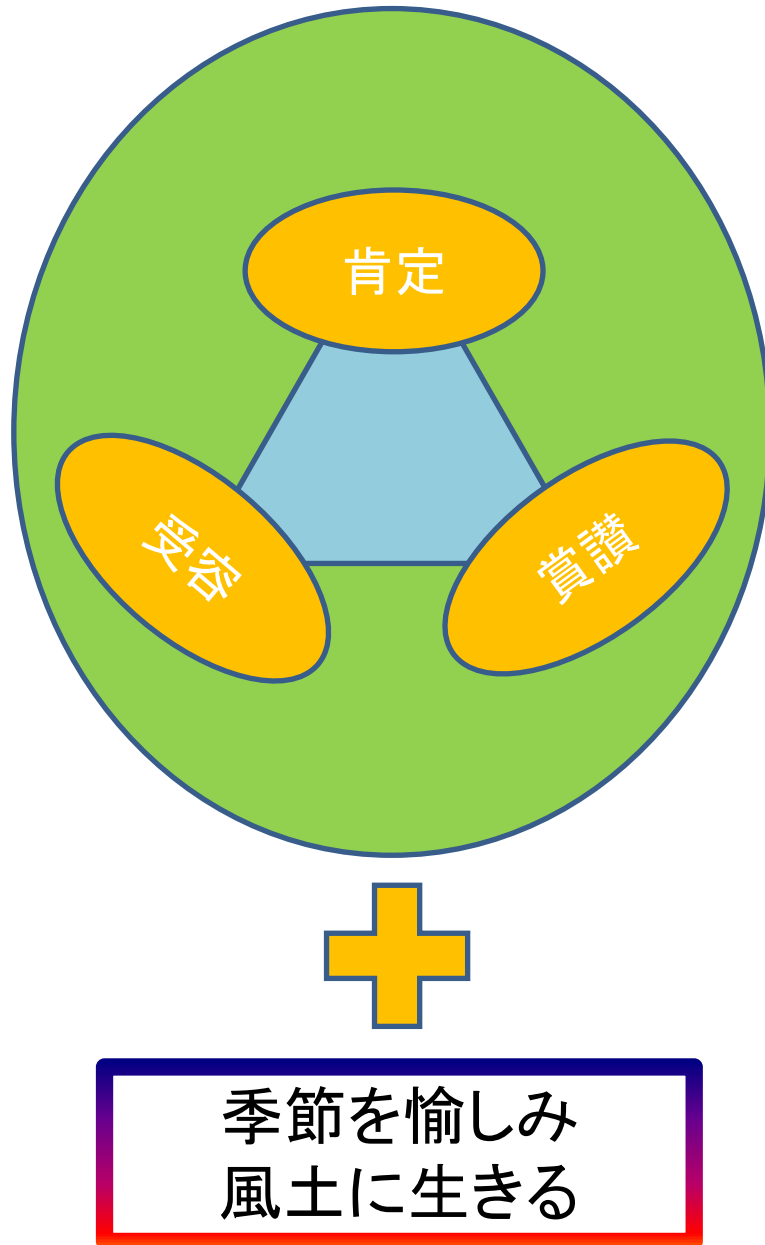
人間は、過去の一切の集合である「原因」を「結果」として

表出させるはたらきを

一時も休むことなく、一切の狂いなく続けている。(続)

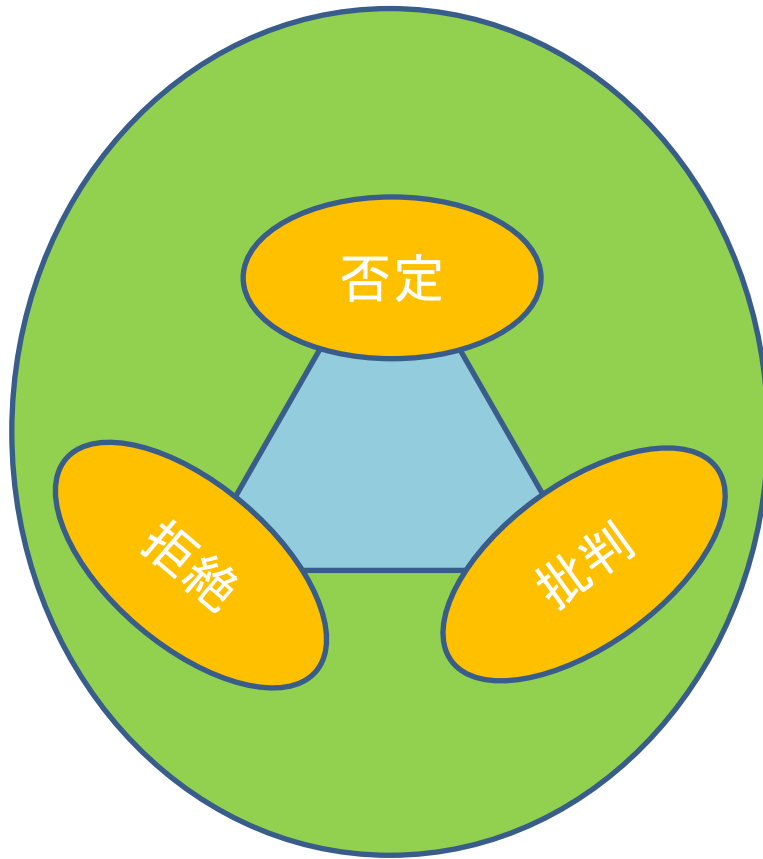
- 文学、絵画、建築、造園、書道、華道、料理、工業製品制作... そこには技術、技能、感性の高まり、成熟に伴い、どんな作品世界が開けていくのか、これもまた想像だにできない。
- 人間には感情というものがあり、これもどこまでも豊かになっていく。感情は顔にも表れる、悲しいときには悲しい表情になり、それを見るとこの人は悲しんでいるようだわかる。可笑しくてたまらないときには、そのような表情になり、その笑い声が変幻、気が狂いそうになるほど可笑しい時の笑い方と、ふっと吹き出す笑い方、これまた多様であり、しかも、まったく同じ笑い方は二度とできない。
- 人間は毎日地球上のあらゆるところで、多様な技を磨きこれを披露し、多様な音を奏で、多様な表現を行い、多様な表情をみせ、多様な声を発する... その技、音、表現、表情、声から、相手を理解していく、相手の至っている境地を共有する。
- 10億人以上に上る人間一人ひとりが、どこで何を為そうとも対応可能で一瞬の休みもなく結果を導くはたらきをする、そしてその「結果」はどんな高みに向かうか、どこまでの深みに至るか分からず、どこまで美しくなるかも醜くなるかもわからない。そして、はたらきそのものは一貫して同じであるが、結果として表出されるものに何一つ同じものはない。

「はたらき」が高まる習慣



- 美しいものを見逃さない。
- 喜ばしいことを見逃さない。
- 幸運を呼び込む。
- 家族・仲間と歓びを分かち合う。
- 感謝の気持ちにあふれる。
- 健康になる。
- 感動する気持ちが高まる。
- 寛容な人格になる。
- 世界を祝福の対象と見る。
- 奉仕する人になる。

「はたらき」が鈍る習慣



季節から遠ざかり
文明に従属する

- 美しいものが見えない。
- 喜ばしいことが見えない。
- 不運・悲運を呼び込む。
- 家族・仲間と苦しみ・悲しみを分かち合う。
- 不平不満の気持ちにあふれる。
- 病気になる。
- 感動する気持ちが衰える。
- 心の狭い人格になる。
- 世界を呪いの対象と見る。
- 奉仕を待つ人になる。

「近代化論」と「内発的发展論」

近代化論

- 1950年代から1960年代にかけて、次々に独立を遂げていった旧植民地の国々をいかに近代化させ、欧米的な意味での国民国家形成をいかに実現していくのかを論じた学問。
 - 1970年代に入ると、近代化論は急速にその影響力を低下させ、精彩を欠くようになる。開発途上国の経済発展が一向に進まず、貧困が減らないことに悲観論が現れ、これまでの開発戦略が途上国の歴史的経験や伝統文化、経済の現状から乖離していることへの見直しが始まった。
 - 文明優先の論理。
 - 今も日本を含む世界は近代化論の影響下にある。
 - 欧米的な価値や「世界基準」への依拠。
 - 地域そして個人にこれまでになかった何かを「足す」発想に現れる。
 - 地域住民は「受益者」に甘んじる。
 - 地域再生においては持続性を欠く(次世代まで継承されるものとならない)。
- (企業の技術革新を軸にした発展には妥当。)

「近代化論」と「内発的発展論」

内発的発展論

- 地域と個人のもつ独自の価値を尊重し、これを基軸とする発展のあり方。
- その要件(宇野(1991))
 - ① 人間を大切にし、人間を社会発展の主人公と考える。
 - ② 発展は地域住民自らの創意工夫によって展開される。
 - ③ 地域の文化・伝統は尊重され、新しい発展の土台とされる。
 - ④ 自然環境・生態系は尊重され、発展との融合・調和が模索される。
 - ⑤ 住民は互いに協力し、新しい開かれた共同体を再構築し、それぞれの内部の構造改革に向かう。
- 文化、風土に寄り添った理論。
- 地域住民は原動力となる。
- 本稿の「では、人間とは何か」でみられる人間観は内発的発展論の根幹にある。
- 地域の再生において、それが内発的発展であれば持続性をもつ(次世代に継承されるものとなる。)

まとめ(2)

- 内発的な地域再生においては、「自主財源」の設計と共同体による運営が有効となる。これにより共同体は経営の単位になる。
- 地域の再生は「内発的发展」である。
- (再出)人間の創造性、美的感性、能力は無限であり、万人に等しく備わっている。これらは人が「風土」に生きているとき、人が「風土」を作っているときに引き出され、発揮される。そこで営まれる衣食住そのものが「文化」となる。
- (再出)地域に生きる人々は「風土」に生き「風土」をつくり、「文化」を育んでいる。「文明」に従属する現代人が「再生」することを助け彼らを救うことができる先導的な位置にある。